

私たちが住んでいる地域の  
人権課題って何だろう。

地域みんなが人権について  
自分事として学べるといいな。



地域の人権教育リーダー  
(地域における人権教育推進者)

「地域のひと・もの・こと」を  
教材とした人権教育がしたいな。

当事者の方々と交流を深めながら  
学習していきたいな。

# 人権教育リーフレット いま ここから 自分から 5

～地域のひと・もの・ことをいかして～

お年寄りにとってやさしい社会は、みんなにとってもやさしい社会  
～まずは、知ることからはじめよう!～

本リーフレットでは、高齢者の問題の中で、特に認知症に焦点を当てることをとおして、高齢者を敬い、いたわる存在という見方だけではなく、人間の尊厳、介護する家族への支援、福祉の在り方について考えていきます。

また、認知症のお年寄りも増加傾向にあり、徘徊時の事故や家族等介護者の負担などが問題になっています。認知症についての理解が不十分なために当事者や介護している家族が地域コミュニティの中で孤立してしまう傾向もあり、地域で支える仕組みづくりが求められています。

長野県は全国トップレベルの健康長寿県であるとともに、高齢者数・高齢化率は一貫して増加傾向にあります。一方、高齢者一人を支える人数(生産年齢人口)は現在の1・9人から平成47年(2035年)には1・5人まで減ると推計されています。(長野県高齢者プランより)



飯綱町お元気くらぶ(認知症予防運動講座)の一コマ

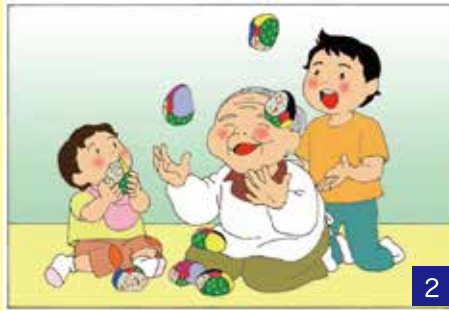
■文部科学省「人権教育の指導方法等の在り方について」(第三次とりまとめ)では、効果的な学習教材の選定・開発についてまとめられています。

人権が尊重される社会づくりを自らの問題としてとらえ、自ら考えることができるようにするなどの教育効果を高めるため、身近な事柄を取り上げたり、児童生徒の興味・関心をいかしたりするといった教材の内容面での創意工夫が求められています。

効果的な教材例として、「地域の教材化」「外部講師の講話やふれあいの教材化」「保護者や地域関係者と共に作る教材」「歴史的事象の教材化」「教材を通して、よりよい出会いをつくるための教材」などがあげられています。

長野県教育委員会

# 紙芝居「大好きなおばあちゃん」



ぼくにはおばあちゃんがあります。おばあちゃんは畑の名人で、おばあちゃんが作る野菜はどれもとってもおいしいです。お手玉もとても上手で、ぼくや妹にやさしく教えてくださいます。  
ある日、おばあちゃんが鏡に映った自分に話しかけているところを見かけました…。



心配になったぼくは、急いでお母さんにおばあちゃんのことを話しました。でも、お母さんはあわてることもなく、「あとでおばあちゃんにお話ししとくね」と言うだけでした。  
そういえば、最近おばあちゃんは食べたばかりのご飯を何度も欲しがったり、トイレと間違えて外に行ってしまうたりします。ぼくは、とても心配になりました。



ある日、おばあちゃんがいなくなっていました。近所の人や消防の人にも手伝ってもらっても見つからず、夜中になっておばあちゃんは帰ってきました。亡くなったおじいちゃんのお見舞いに病院に行こうとしたようです。次の日、お母さんが「おばあちゃんは認知症という脳の病気なんだって」と話してくれました。



「認知症のことをよく知らなくて、おばあちゃんにひどいことを言っちゃったけど…」と話すお母さんは、病気のことを勉強したそうです。でも、いろいろ忘れても、おばあちゃんのいい所は何も変わっていません。ぼくにはまだ病気のことにはよく分からないけど、おばあちゃんが困っていたら何でも手伝おうと思います。

※このページは、飯綱町が作成した紙芝居「大好きなおばあちゃん」をもとに作成しました。

# 地域素材の発掘と教材化 ～思い描いてみましょう!～

## モデル地域（飯綱町）の取組に学ぶ

飯綱町では、平成 19～20 年度に、国から「認知症地域支援体制等構築事業」の指定を受け、「一人ひとりの思いや暮らしを大切に、認知症の本人や家族の方が、穏やかに、その人らしく、なじみの暮らしを続けられる町」をめざして、さまざまな事業に取り組んできました。

その取組から「高齢者の人権」の教材化について思い描いてみましょう。

## うんまく「ボケ」りゃいいやさ いいつな町 ～モデル地域指定スローガン～

### 1 「認知症」についての町民意識調査（平成 19 年度実施）

- 町民の約 8 割が「認知症」を病気と認識はしている。
- △「こわい」「悲しい」などの悲観的なイメージが強い。
- ⇒そのために、「予防」に関しては意識が高いが、どのように相談したらよいかははっきりしない。

## 認知症支援ネットワーク会議（地域ケア会議）

### 2 さまざまな事業を立ち上げ、その主体となるチームを編成

#### 【認知症早期発見、早期サービス利用普及事業】

認知症専門医、物忘れ外来の設置等に向けて医師等の専門職が早期発見と早期サービス利用を支援する。

#### 【認知症地域支援体制推進事業】

地域住民、公的機関、児童・生徒への認知症の知識普及および啓発をする。

- サポーター養成・育成チーム
- 公的機関啓発チーム
- 児童・生徒啓発チーム
- うんまくボケる戦略チーム

⇒さまざまな機会に、「認知症」について正しく知る活動を展開

キャラバンメイト約 50 名、認知症サポーター約 2,000 名に増加

#### 【認知症ケアサポート事業】

家族の人の支え方を考え、ケアの向上を図る取組み、相談を受ける体制をつくる。

- 家族支援チーム
- 福祉事業者等の地域拠点化

#### 【SOSネットワーク構築】

町内のあらゆる団体、関係機関、地域住民が支援する体制をつくる。

- 地域支援チーム

#### 【地域資源マップづくり事業】

自治会、いきいきサロン等で認知症支え合いマップを作成する。

### 3 「認知症」についての町民意識を再調査（平成 20 年度実施）

- 以前は「お年寄り本人は何もわからないからいいけど、家族が大変」と考えていたのが、「わからなくなっていく本人が一番大変」と変化してきた。
- 徘徊されている方への声かけも積極的になった。

町民への啓発を進めて「認知症」への理解が深まったことで、自分事として考える人が増えたんだね。



「認知症に対する地域支援体制づくり」を教材化して、  
地域の人権課題についてみんなで学習を深めたい!

「認知症のこと」や「認知症の方への関わり方」について体験的に学び合い正しい理解を深めること、認知症の方やそのご家族と交流しその思いにふれることをとおして、悲観的なイメージがありがちな「認知症のこと」や「高齢者の人権」を自分事として考え、ともに歩んでいこうとする意識を高められる学習を展開していけるといいな。

## こんなふうに学習したい！

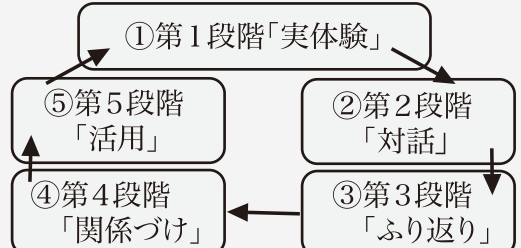
- ① 地域教材（地域のひと・もの・こと）に出会い、ふれあう「**実体験**」を通して、はったり、心をふるわせたりするような学習をしたい。
- ② 地域教材を通して感じたり考えたりしたことを身のまわりの人たちと気軽に「**対話**」できるようにしたい。また、地域・学校・家庭において、みんなの共通の話題にしていきたい。
- ③ 地域教材にふれる中で、自分の見方や考え方、生き方やあり方について「**ふり返り**」たい。
- ④ 日常的に起きている様々な事柄と「**関係づけ**」て考えていけるようにしたい。
- ⑤ 地域教材から学んだことを「**活用**」しながら、いま・ここから・自分から行動したい。

## 人権教育の指導法の工夫

### 【第三次とりまとめ】体験的な学習に関して

個々の学習者の体験をはじめとして、他の学習者との共同作業としての「話し合い」、「反省」、「現実性活と関連させた思考」の段階を経て、「自己の行動や態度への適応」へと進んでいくと考えられます。

体験的な学習に関して（指導等の在り方編 P.28）をもとに構想した“学びのサイクル”



## キーワード ~感じ 考え 行動する学びへ~

- ① 実体験    ② 対話    ③ ふり返り    ④ 関係づけ    ⑤ 活用

### ① 実体験

【学習のねらい】認知症のことや、認知症の方やそのご家族の思いに触れて、自分なりの思いや考えをもつ。

#### 紙芝居『大好きなおばあちゃん』を読む



紙芝居『大好きなおばあちゃん』（飯綱町作成）

認知症への理解を深めるために飯綱町で作成されました。認知症の症状や、認知症の方を支えるご家族と地域の方たちとのつながりの大切さが描かれています。

#### 『認知症サポーター講座』に参加する



[地域で]

指導者としての養成講座を修了したキャラバンメイトや地域包括支援センター、社会福祉協議会の方が、「認知症」の正しい理解を進めるために公民館や学校など、各地で『認知症サポーター講座』を開催しています。「認知症の症状」や「関わり方、支え方」について、体験的に学ぶことができます。



[学校で]



「認知症」って、家族のこともわからなくなってしまうんですね。なんだか「こわい」というイメージがあるけど、ホントのところ認知症の方やそのご家族はどんな思いでいるのだろう…？

※紙芝居『大好きなおばあちゃん』は飯綱町社会福祉協議会で認知症啓発DVDとして販売されています。

## ② 対話

【学習のねらい】身のまわりの方たちと語り合う中で、自分の見方や考え方を広げる。

### 『オレンジカフェ(認知症カフェ)』に参加する

『オレンジカフェ(認知症カフェ)』とは、認知症の方とそのご家族、地域住民、行政担当者など、誰でも参加できて、人と人がつながり、お話や情報交換ができる『憩いの場所』です。



### 認知症の方やご家族との対話

- 認知症になっているんなことを忘れてしまったり、できないことが増えたりしても、「誰かの役に立ちたい」、「仕事をしたい」、「何かをやりたい」など、「自分らしく生きていきたい」という思いを持っていることに改めて気づかされました。
- 介護しているご家族の中には、家族が認知症になったことを誰にも話すことができず、介護していく上での困りごとや生きづらさを抱え込んでしまって、人知れず苦しんでいる人が多いそうです。
- 「オレンジカフェに参加するようになって、同じ苦しさを抱えながら介護されているみなさんと語り合うことで、気持ちが楽になりました」と話してくれた介護者の笑顔を見て、困りごとを共有することの大切さがわかりました。

### 地域住民ボランティアとの対話

- ふだん病院などで傾聴ボランティアをしている中での出会いから、病院に来るほどではなくても困っている人がいるのではないかと思い、オレンジカフェに参加するようになったという女性は、「私自身も認知症の方やご家族とお話することで元気をいただいています」と教えてくださいました。
- 町の『認知症サポーター講座』に、自分にもできることがあるはずという思いで参加しているという方は、「ご家族の話を聞いていると介護の大変さが身にしみますが、私たちと話すことで少しでも気分を変えることができたらうれしく思います」と語ってくださいました。
- 多くの方が、「認知症の方やご家族と話していると、もっとたくさんの人に認知症のことや介護されている方の悩みなどを理解してもらいたいと強く思います」と話してくださいました。

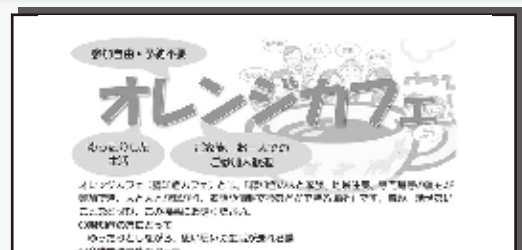


### 行政や社会福祉協議会の担当者の思い

- 私たちが認知症の方やご家族を地域で支えるための施策を実施していく上で、オレンジカフェなどの場で当事者のみなさんやボランティアの方から直接ご意見を聴けるのはとてもありがたいです。より充実したサービスにつなげたいと思います。



みなさんとお話していて、私たち自身ももっと自分事として認知症のことを、より深く理解しなければいけないと感じました。  
認知症の人やご家族を支えるために、私にどんなことができるだろう…？



【飯綱町オレンジカフェの案内】

### ③ ふり返り

【学習のねらい】これまでの自分の見方や考え方についてふり返り、自分事として考える。



実際に関わっておられる方々のお話をもとに、再び話し合ってみましょう

自分も歳をとればできないことが増えてくるだろう。それを責められたら切ないな。認知症になってしまった人が一番悲しいんだ。自分ならどう暮らしたいだろう…？



#### 【NPO法人理事長さんのお話】

みなさんが認知症になったら、大切な人が認知症になったら、どこでどのように暮らしたいですか？どこでどのように支えたいですか？

周りから指図されず、自分の思ったとおりの人生を送りたくありませんか？

そのためには、大切な人と、家族と、認知症になる前から話し合い、地域で支えるために、今の自分には何ができるのかを考えて、小さなことから行動することなのです。



私の親も認知症の兆候があるから、これから先、どう暮らしていきたいか、きちんと話し合っておきたいわ。そして、今自分にできることをいっしょに考えてみよう。

### ④ 関係づけ

【学習のねらい】学習したことと日常の中での様々な出来事とを関係づけて考え、自分ができるところを見つける。

高齢者の方が、様々な悩みや困りごとを抱えていても、そのことを近所の人に話さなくて、苦しさや悩みを抱えて孤立してしまっているケースがあります。その方々に対して、私たちはどのように接していくことができるのでしょうか？



自分の身の回りにある現実を見てみましょう

「おじいさんの気持ち」大阪府履正社学園豊中中学校2年 三井 仁さん  
第35回全国中学生人権作文コンテスト「法務事務次官賞」受賞作品(P.6参照)  
後見人の母とともに近所の認知症のお年寄りを見守っている中学生の作文



仁さんの町内では、高齢者を見守る環境が整えられているのですね。お年寄りやご家族も、同じ地域に住む仲間として、ともに支え合う大事さを感じます。私たちの地域でも、一人一人の悩みを聞ける環境をつくりたいですね。



そっと見守ることの難しさを感じます。仁さんはごみ箱にフタをすることで、おじいさんの思いに寄り添い、これからも起こるであろう現実を共に受け止める覚悟ができたのでしょうか。



## 「おじいさんの気持ち」

大阪府 履正社学園豊中学校二年  
三井仁（みついいじん）

僕の町内は、お年寄りを見守る環境を整えようと努力している。常に声をかけたり、孤立しないように、集まって食事会やイベントを計画したりしているようだ。近所に住むお年寄り夫婦は子どもがいなくて自分達でこまっていたので僕の母が後見人になってもう一年ぐらいお世話をしている。おばあさんは認知症が進んでいて、毎日出歩いてしまう。幸い遠くへは行かないので近所の人で見守っている。母は後見人になってから毎日常大変忙しくしている。本来、後見人は日々の生活のお世話までしなくてもいいのだけれど近所で毎日目にするのと放つてはおけないらしく、洗たくやそうじ、時には買物もする。デイサービスにお願いできるそうだが、おじいさんが、知らない人に何でもたのむのに抵抗があるらしい。夏休みで僕も少しは役に立つことはないかと、おじいさんとおばあさんの家に行った。おばあさんは少し前に見たより、大分認知症が進んでいるのを見てとれた。僕は立ちすくむしかなかった。母がさっさと用事しているのがすごいなと思った。

庭におじいさんがいたので、話しにいった。おじいさんは庭でトマトやナス、朝顔の種を植えて育てていた。

「これは紫の花がさくんや。」

「ナスは一つだけ残してまた来年のために種をつくつくんや。」

とにこにこして、説明してくれた。まだ少しいさなナスと青いトマトを指さして、

「これ、あと少ししたら、とりにおいで。」

と言ってくれた。うれしくて二日後、また僕はおじいさんの家に行った。すると、じっと庭ですわっているおじいさんが何か様子がおかしい。

「おじいちゃん。」

と声をかけると、だまっている。おじいさんの見ている先に目をやると、トマトやナスや朝顔がなくなっていた。

「あれ、何でなくなってるの。」

と聞いても、だまっていた。

すると、家からおばあさんが出てきた。ごみ袋をさげて出てきた。よく見ると、トマトやナスや朝顔が根元から引き抜いて入れあった。どうやらおばあさんはそれを雑草とまちがえたのか全部根元から引き抜いてしまったのだ。

「あつ、そんなしたらあかんやん。」

と思わず言ったがおじいさんは

「ええんや。わしがしたんや。」

と言った。僕はだまってそのまま家にかえって母に話した。すると、やはり、引き抜いたのはおばあさんらしい。今回だけでなく、何度もこんなことはあるが、その度におじいさんは、おばあさんをかばうそうさだ。母が言うには、おじいさんはおばあさんを認知症だと思いたくないらしい。おじいさんの中では、おばあさんは元気な時のままのおばあさんでいてほしい。他の人から認知症と思われる、そのようにあつかわれたくないのだ。もつと認知症が進み施設に入らないといけないよう

になったら、とそんな不安があるのだろう。僕はどうすることもできない認知症の病気の現実と、おじいさんの気持ちを考えると胸がつまる思いだった。

母は僕に「おばあさんを責めたり、おじいさんにその事で何も言ってはいけない。」と言った。

そつと見守るといふことのむずかしさを知った気がする。

僕はおじいさんが好きないちじくを買って持っていた。おじいさんは、にこにこして「ありがとう」

と言つて皮をむいておばあさんに食べさせていた。二人ともににこにこして先ほどのことを忘れていたようにだった。

「また遊びにくるわ。」と言うと、

「絶対来てや。」と二人が言った。

ごみ箱にすてられたトマトとナスと朝顔の苗が見えた。

僕はごみ箱にフタをして家にかえった。

第三五回全国中学生人権作文コンテスト  
法務事務次官賞受賞作品  
（主催 法務省、全国人権擁護委員連合会）



## ⑤ 活用

【学習のねらい】学習してきたことを具体的な場面で、態度や行動にあらわす。



飯綱町では、認知症地域支援を通して、高齢者の方やそのご家族の方を支えるために、様々な取組をしていることが分かりました。私たちにもできそうなことがありますよね。



### ～認知症支援ネットワーク会議 (地域ケア会議)～

行政が主体となって、社会福祉協議会や医療機関、福祉施設、警察、郵便局などの町内のさまざまな関係機関と、地域住民が集まって、認知症の方やそのご家族の支援について話し合います。

医学的に認知症について学んだり、グループワークで認知症の方やそのご家族との関わり方について考え合ったりしています。

#### 《ある日のグループワークより》

- ①自分たちが認知症だったらどのように声をかけてほしいと思うか話し合う。
- ②話し合ったその思いを、声をかける側の人に伝えるための簡単な文を考える。
- ③できあがった文を使って、地域の人に声がけを勧めるチラシにまとめる。

### ～徘徊模擬訓練～

ある日、町内に無線放送が流れました。町内のお年寄りが行方不明になったようです。

同じ情報が「ささえ愛ネットワーク」登録者にも一斉メールで配信されました。徘徊者役は「あんしん暮らしのパートナー」の協力者のみなさん。町内5ルートで歩いています。

歩き始めてしばらくたったころ、中学生の子どもたちが声をかけてくれました。以前、学校で「認知症サポーター講座」を受講したそうです。

また、車で通りかかった若い男性もわざわざ車を止めて声をかけてくれました。



「僕は、おばあちゃん子だから、放っておけなくて…」と話してくれました。



私は、町の地域包括支援センターが主催した「<sup>らくのう</sup>楽脳講座」という介護予防サポーターを養成する講座に参加しました。自分の介護予防にもなるし、サポーターとしてうちのおじいちゃんやご近所の方にも教えてあげたいな。



この前、「i (アイ) バス」(町営デマンド交通)でおばあちゃんと買い物に行きました。そのとき、あとから乗ってきたお年寄りが乗り降りに苦労していました。知らないお年寄りだったけど、いつもおばあちゃんにしているように手をつないで乗り降りをしました。



認知症について学び、認知症のお年寄りやご家族に向き合うことで、お年寄りにやさしい社会の実現が大切だと感じました。

それは、地域みんなにとってもやさしい社会ということですね。



#### 《人権教育リーフレットの作成にあたって》

「認知症のお年寄りを地域で支えるネットワークづくり」を教材化した学習事例や関係資料等の編集・掲載等については、飯綱町、飯綱町社会福祉協議会、飯綱町立三水第二小学校、特定非営利活動法人やじろべー、その他関係者の皆さまのご協力をいただきました。